

蔵から出してきた絢爛豪華な歌舞伎衣装を広げる
平島、伊藤両区長



茅野 明治に仕立てた衣装虫干し

「穴山歌舞伎」地域の宝を後世に

茅野市穴山区は9日、明治時代に盛んだった「穴山歌舞伎」で使用していた衣装の虫干しを穴山公民館で行った。村芝居は途絶えたが、「貴重な村の宝」を後世に語り伝えていくと年1回、区長の仕事として受け継がれる。区が公民館横の郷蔵に保管する約45点の衣装やかつら20数点を2階広間に広げて風を通した。

区民にも公開した。

同区などによると1850（嘉永3）年に舞台（公民館）が完成し、村総代の責任のもとに歌舞伎芝居が上演された。最盛期は87（明治20）年頃で、村の狂言役者、伊藤伝五郎の名声は諏訪の各地にとどろいた。当時は4日間の興業で8千人の見物客を集めた。

区長の平島輝久さん（56）と伊藤誠さん（56）は「こんなに豪華な衣装を作れる大きな村だったことを改めて感じた。穴山の歴史に詳しい伊藤博夫さんが亡くなり、話を聞けなくなつたのは残念だが、子どもたちにも歴史を知ってもらい、大切に守っていききたい」と話していた。

（武井葉子）

明治以降は衣装などを管理する組合ができ、村人が役者になるだけでなく旅行者の興業も行われ、地域ぐるみの娯楽として親しまれた。芝居は青年団の演芸として戦後まで続くが、昭和40年代の公民館建設で舞台とともに姿を消した。

衣装は、1878（明治11）年に仕立てたものが多く、紋の入った袴をはじめ、獅子や竜などの刺しゅうや染めが施された豪華絢爛な着物など。